
Workers

くらいしす

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Workers

【Nコード】
N6162M

【作者名】
くらいしす

【あらすじ】
運命を『治す』という仕事をこなす“Workers”

そのWorkerとして働く

人間の女の子と

天使と人間のハーフの男の子の物語

ファンタジーラブストーリー？w

『Worker』

某年 2月

夜、輝く都会にいくつもあるマンションの内
高くもなく低くもない灰色の

11階のベランダに一人の少年は立っていた。

少年は浮かない顔をして、手摺りにより掛かっている。

ずいぶん前から付き合いがあり、とても親しかった女の子に
交際を申し込んだ途端に態度が急変し、フラれてしまったのだ。

「なんでかなあ・・・。」

二人は明らかに互いを想い合っていた。

しかし、彼女は人が変わったように少年を突き放し

「何か分かんないけど無理っ！ごめんっ。」

と、全く意味の分からない言葉で去って行ってしまった。
少年は立ち尽くすしかなかった。

そして今、少年は何かがおかしいと思いつながら、
かといってどうすることも出来ずにいる。

「はああああ。」

一際大きくため息をつき俯く。

少年が部屋に戻ろうと顔をあげると

「……え？」

ベランダの手摺りに人が立っていた。

星の見えない都会の暗闇に溶け込むように
黒いコートを着てフードで顔を隠し、佇んでいる。

少年は訳の分からないことだらけで頭が一杯になり、
逆にコートの人間に対するはつきりとした疑問が思い浮かばなくな
ってしまった。

「あ、あのー・・・？」

少年がとりあえず恐る恐る声をかけると

「……。」

フードの中から返答はなく、

コートの人間はそのままの状態束手摺りから降り立った。

コートの人間がフードを外すと、

そこには精悍な少女の顔があった。

少年が未だ状況を飲み込めないでいると、

「あの……。荒木、佑さんですよね？」

少女は口を開き、少年に聞いた。

「え？あ、はい。まあ」

少年は少女の声に驚きながらも答えた。

少女は英国紳士のようなお辞儀をして、こう言った。

「初めまして。 “Worker” です。貴方の運命『治し』ませんか？」

「荒木佑、荒木佑と・・・あった。」

鎮まり返った住宅街の中で、

先程の少女は街灯を頼りに手帳のようなものをめくっていた。
手帳には顔写真とともに個人情報載っている。

そして『荒木佑』と先頭に書かれたページに少女は大きくバツを書いた。

すると”バツ”は生きているかのように動き出した。
伸び縮みしながら器用にページを手帳から切り離し、
一部を羽根に変えて飛んでいった。

「よし、今日の仕事終わりっ。帰ろうルー。」

少女がそう闇の中に呼びかけると、
背景に同化していた猫がオッドアイを輝かせて出て来た。
右目はブルー、左目は灰色^{アッシュ}になっている。

ルーは差し出された主人の手から腕、肩へと登った。

「ふ・・っ。」

少女が自ら自分の肩を抱き、力を込めると、
コートにはりついていて翼が顔を起こした。

少女はそのまま地を蹴り、漆黒の翼を羽ばたかせ舞い上がっていった。

「ただいま。」

「おかえり〜。」

少女はさも当たり前のように返ってきたその言葉に無茶苦茶驚いた。

「る、る、ルシフェルさんっ！？何でここにっ？」

ルシフェルと呼ばれた男はソファアに座ってニコニコしている。

白い肌に銀の髪、そしてルーと同じオッドアイである。

「何って、琉^{るく}來に会いに来たんだよー？」

ルシフェルはそういつて立ち上がり、

少女、琉來を抱えて再びソファーに沈み込んだ。

「きゃあ?!」

突然のことに琉來は思わず悲鳴をあげた。

ルシフェルは琉來を後ろから抱きしめる。

琉來は顔を赤らめ、もじもじしている。

「お仕事お疲れ様。今日もちゃんとノルマ達成した?」

耳元から聞こえる声がくすぐったいのか、

琉來は目をぎゅっとつぶったまま早口で答えた。

「当たり前じゃないですかっ

まだFクラスなのにサボってなんかいられませんよっ。」

「ふーん。

俺なんか仕事なさすぎてつまんないよ。琉來いないし。」

ルシフェルは甘えた声をだして琉來の頭にほお擦りをした。

「だってルシフェルさんはNクラスのトップじゃないですか。仕事が少ないって当然ですっ。」

琉來はむっとして言い返した。

“Worker”には

仕事を始めて一年以内の

Fクラス

そして通常の
Nクラス

最後に数人しか所属することができない
Sクラスが存在している。

クラスはF・N・Sの順にランクが高くなり、
仕事の難易度もあがる。

そして人数の多いNクラスだけではその中でさらにレベルが分けられる。

「それにルシフェルさんに仕事が増えたら、
この世界が間違った運命だらけになっちゃいますよ。」

琉來が不安そうに呟く。
ルシフェルは琉來の頭を撫でた。

Workerの仕事は悪魔・魔王^{サタン}によって変えられてしまった運命を治すこと。

よってWorkerになれるのは特殊な能力を持つ
人から天使と呼ばれる存在、
そして超能力者の類に入る人間だけである。

「俺はこれだけの力を持っていたことが嬉しいよ。
トップじゃなけりゃ琉來に会えなかった。」

ルシフェルは琉來を向かい合わせに自分の膝に座らせて
優しく笑いかけた。

言葉通り、琉來本人もルシフェルに運命を『治し』てもらった一人
である。

本来、治された当人はWorkerとの記憶を忘れるが、
琉來はある事情からそのまま記憶を無くすことなく、
そのうえWorkerになるという異色の存在であった。

琉來はじつと見つめてくるルシフェルを直視出来ず顔を反らした。

それをごまかすように琉來はルシフェルに問い掛ける。

「ルシフェルさんはそれだけ実力があるのにどうして上にはいかな
いんですか？」

「・・・いけないんじゃない、かな。俺ほら、これだし。

」

ルシフェルは目と灰色の翼、“なりそこない”の証を示した。

ルシフェルは天使と人間の間に生まれた禁忌。

そのため天使と同じ翼を持つが色はくすみ、

劣性遺伝の証拠のオッドアイをしている。

「あっ・・・そうか・・・ごめんなさ・・・っ!？」

しゅんとしてしまった琉來の言葉を遮るようにルシフェルは琉來の

口を自分の口でふさいだ。

「謝ることなんてない。今は琉來がいる。俺はもう一人じゃないんだから。」
その言葉を聞いて琉來は笑顔になった。

「私も、貴方のおかげで一人じゃ、ない。」

琉來は事故で家族を亡くした天涯孤独の身にある。

ルシフェルは琉來の笑顔を見て、再び唇を重ねた。

「ん・・。・・っ？」

んんっ！

ん・・っ、はあっ！」

琉來は突然侵入してきた湿った柔らかいものに驚き、
ルシフェルを突き放した。

「もうっ！まだし、舌はダメって言ってるじゃないですかっ！」

琉來は顔を真っ赤にさせながら怒った。
ルシフェルは不服そうな顔をしている

「へー『まだ』なんだ？じゃあいつからいいの？」
ルシフェルがニヤニヤしながら聞くと、
琉來は返答につまり、何も言わずベッドに潜ってしまった。
ルシフェルがあとから入ろうとすると

「入ってきたら家から追い出します。」

背を向けたまま淡々と言った。

「何にもしないよー。」

「ダメです。」

「絶対何にもしないから。」

ルシフェルが真剣な顔で言うと、

琉來は渋々シーツの端を持ち上げ、ルシフェルはそこに滑り込んだ。

「・・・何かしたら即刻ベランダ閉めだしますからね。」

琉來は顔をしかめて、背中を向けた。

ルシフェルはそんな琉來の態度を見て微笑み、
後ろから琉來の体に腕を回して力をこめた。

「なっ・・・!」

琉來は必死に抵抗するが腕ごと抱かれていて、
なす術がない。

「これだけだから。」

ルシフェルの声が真面目なのに驚き、
琉來は抵抗を止めた。

そして二人はお互いの暖かさを感じながら眠りに落ちた。

次の『仕事』が大きな変化をもたらすとも知らずに

くつつくー。

？・始まりの朝

朝

琉來が目覚めると

枕には頭一つ分の跡だけが残っていた。

眠い目を擦ってベッドから体を起こすと

半開きの扉から真面目な表情でケータイを耳に当てるルシフェルが見えた。

「-はい。」

はい、分かりました。

・・・それは義務ですか？

・・・分かりました、連れて行きます。」

ピツと通話を切るとルシフェルは

扉の向こうでゆらゆらしている琉來に気付いた。

ふ、と微笑み

琉來の方へ真っすぐに歩いてきて、
その隣に座った。

「おはよう？」

ニコニコしながらルシフェルはその髪を撫でる。
「・・・。」

それでも琉來はぼーっとしている。
目も虚ろのまま。

ルシフェルは少し考えて、
「・・・んっ!？」

琉來に目覚めのキスをした。

琉來は驚いて逃げようとしたが、
いつの間にかルシフェルの手が背中と後頭部に回っていて
すでに逃げられない状態になっていた。

「ん~~~~っ、っはあ
んんっ・・・っ。」

ルシフェルは角度を変えて何度も琉來の唇を捕らえる。

琉來の力が抜けて、やっとルシフェルがその手を離れた。

琉來は顔を赤らめ今度は違う意味でぼーっとしていた。

そして、はっと意識を取り戻し
「もうっ!!朝っぱらから何やってんですかっ!!」
と

枕をルシフェルにぶん投げた。

しかし琉來は気が抜けてしまったので力が入らない、
よってルシフェルにもたいしたダメージは与えられなかった。
軽く手で枕を払い、突然琉來をお姫様だっこした。

「・・・なっ!？」

部屋から運び出し、そのままリビングの椅子に座らせた。
テーブルの上には出来立ての朝食が乗っている。

「・・・今日私仕事休みなんですが。」

「ん？それで？」

ルシフェルは笑顔で琉來に向かい合うようにもう一つの椅子に座る。

「なんでこんな早くに起きなきゃいけないんですかつ！」

琉來が机を叩いた。

ただ今の時効

- 03:33

もちろん24時表記である。

「ルシフェルさん子供じゃないんだから

仕事なら一人でさっさと行ってくださいよ。」

せつかくの休みなのに・・・。」

琉來が本気で落ち込んでいる。

ルシフェルはため息をついて申し訳なさそうな顔をして、

「ほんとなー。」

俺も琉來寝かせて起きたかつたんだが、

そーいうわけにもいかなくなっちゃったんだよ。」

「・・・それってどーゆーことですか・・・？」琉來が何かを察して聞き返した。

「・・・確かに俺の仕事なんだか・・・琉來を連れて行って。」

「・・・へ？」

まさかの事情に目を丸くする。

- Workerは普段個人で仕事をするが、

難易度の高い仕事については助っ人を呼ぶことがある。

しかし、

それはランクが近い人に限る。

ましてNクラスのトップと

Fクラスに入って半年も立っていない初心者が組むことは有り得ないのだ。

「な、なんでですか・・・？」

「何か知らないけど上からの指示だ。」

訳は教えてもらえなかった。」

ルシフェルはその言葉を聞いて
考えこむ琉來の肩を叩いた。

「考えたって無駄だ。上の連中の思考なんて誰にも分かりやしないんだから。」

そんなことより、俺は琉來と仕事が出来るなんてこんないい機会はないと思うけどな？」

「それでいいんですか・・・？」

はーあ、と琉來は楽観的なルシフェルにため息をついた。

「まあ、クライドも問題はないっていつてんだから大丈夫だろ。」

「え？クライドさんが？」

クライドとは唯一ルシフェルと親しくしてくれるSクラスの一人で

ある。

つまりルシフェルの上司。

「そっかクライドさんも・・・。

っていうか助っ人が必要だということは
難しい仕事なんですか!？」

琉來が目を輝かせる。

ルシフェルはそんな琉來にウケて机をばんばん叩いている。

「何がそんなにおかしいんですかつ」

琉來がむくれるとルシフェルは笑いを堪えながら頭を撫でた。

「いや、ほんとにお前この仕事好きなんだな。

フツ―は嫌がるぞ。」

「いいじゃないですか。

私はただ、この仕事に誇りを持つてるだけです。」

かつて自分を救ってくれたWorker。

まさかなれるとは琉來も思っていなかった。

クライドがためしに受けさせてくれた能力試験に合格した時の喜び
を琉來は思い返していた。

「・・・そっか、

じゃー仕事行くかつ。」

ルシフェルが立ち上がって真っ黒なコートに袖を通す。

琉來もそれに続く。

「はいっ！」

そして事件は始まりを迎える。

つづく

？ ・ 始まりの朝（後書き）

なんかグダグダになっていますが；
次回からちゃんと始まりますんでっ！

よろしくです

m (・) (・) m w
|

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6162m/>

Workers

2010年10月9日05時42分発行